

(19) ブロッコリー

ア 各病害虫の防除

根くち病

根こぶ病

菌核病

べと病

黒腐病

花蕾腐敗病

アオムシ、ヨトウムシ

アブラムシ類

コナガ

ネキリムシ類

ダイコンシンクイ(ハイマダラノメイガ)

オオタバコガ

ハスモンヨトウ

ナメクジ、カタツムリ

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

根くち病

(耕種的・物理的防除)

- 1 3年間あぶらな科作物を作付けしない。
 - 2 作物の地際部を傷つけないようにする。
 - 3 発病株は抜き取り、ほ場外に埋め込む。
- ※苗に雨を当てないようにする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 床土を消毒する([共通防除の章の資料・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 発病を認めたら、薬剤を施用(散布)する。

根こぶ病

・[共通防除の章の資料・苗床・本ぼの消毒の項\(根こぶ病菌によるあぶらな科野菜根こぶ病防除\)](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病歴のないほ場を選定する。
- 2 連作を避け、あぶらな科以外の作物と4～5年以上のサイクルで輪作する。
- 3 発病ほ場では抵抗性品種を作付ける。
- 4 遊走子が根に感染するためには水が必要であるため、ほ場の排水を良くする。
- 5 水稲後作では高さ20～30cmの高うねとし、うね内の停滞水をなくす。
- 6 地温が18℃以上で発病するため、は種時期や定植時期を調整する。
- 7 pH7.2以上では発病が抑制されるため、土壌pHを矯正する。
- 8 罹病残さから休眠胞子が拡散するため、発病株は早期に抜き取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- 9 発病ほ場から耕うん機等を移動する際には、機械に付着した休眠胞子を取り除くため、土をよく払い落とし、丁寧に水洗する。
- 10 ほ場内のあぶらな科雑草も伝染源となるため、除草を徹底する。
- 11 地床育苗する野菜では、4～5年間あぶらな科作物を栽培していない、排水条件の良い場所に、は種床を設置する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤により土壌消毒する([共通防除の章の資料・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。
- 2 発病が予想される場合には薬剤を施用する。

菌核病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病したら菌核ができる前に抜き取る。
- 2 残さをは場周辺に放置しない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病を認めたら、薬剤を施用(散布)する。

べと病

(判断、防除に関する措置)

- 1 花蕾が侵されると、形がいびつになり、基部に不整形の黒色病斑を生じる。

(耕種的・物理的防除)

- 1 肥料切れしないようにする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 予防的に薬剤を施用(散布)する。

黒腐病

(耕種的・物理的防除)

- 1 あぶらな科作物の連作を避ける。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 2週間間隔で3回程度、展着剤を加えて薬剤を施用(散布)する。

花蕾腐敗病

(耕種的・物理的防除)

- 1 適正な施肥量を守り多肥栽培にならないようにする。

※基肥窒素が多く、石灰不足のほ場で発生しやすい。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 微生物殺菌剤を散布する。
- 2 2週間間隔で3回程度、展着剤を加えて薬剤を施用(散布)する。

アオムシ、ヨトウムシ

(予防に関する措置)

- 1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 2 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆や防蛾(が)灯(黄色灯)の夜間点灯を行う。
- 3 種に応じて交信かく乱剤を活用した防除を併用する。
- 4 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
- 2 生物農薬を活用した防除を行う。
- 3 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 4 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【アオムシ】](#)・[【ヨトウムシ】](#)

- 1 生物農薬を散布する。
- 2 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

アブラムシ類

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 生物農薬を予防的に散布する。

※天敵の放飼と薬剤散布(殺菌剤を含む)とを併用する場合は、[農薬安全使用に関する参考資料の章の「天敵等への化学農薬の影響の目安」](#)を参照し、天敵に影響の少ない農薬を選択する。

※アブラムシ類の生息密度が高まってからの放飼は十分な効果を得られない場合があるので、発生初期からの放飼が重要である。また、アブラムシの種類と天敵の組み合わせによっては、効果が認められない場合がある。

- 2 気門封鎖剤を散布する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤を施用(散布)する。

コナガ

(予防に関する措置)

- 1 防虫ネット等の使用により、成虫の飛来及び産卵を防ぐ。本虫に対しては、1mm×1mmの目合いで効果が高い。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆を行う。
- 4 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 卵や若齢幼虫が寄生している葉を見つけ次第、除去する。

- 2 生物農薬を活用した防除を行う。
- 3 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 4 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 5 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交信かく乱剤を活用する。
 - 2 生物農薬を予防的に散布する。
 - 3 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。
- ※コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避け、数群でのローテーション散布を行う。なお、既に抵抗性の発達している薬剤も認められるが、その程度は地域により差があるため、実際の使用状況から推測して薬剤を選択する。

ネキリムシ類

・ [共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 被害株の株元にいる幼虫を捕殺する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 薬剤を施用（散布）する。
- 2 定植時までに薬剤を処理する。
- 3 定植後は薬剤を施用（散布）する。

ダイコンシンクイ(ハイマダラノメイガ)

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

オオタバコガ

・ [共通防除の章のオオタバコガの防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 2 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆を行う。
- 3 本種に対しては、防蛾用黄色蛍光灯の夜間点灯の効果が高い。これは、ハスモンヨトウやシロイチモジヨトウなど他の夜行性の蛾にも効果がある。
- 4 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等を行う。
- 2 寄生果を見つけ次第、除去する。
- 3 食害や糞の近くには幼虫がいる可能性が高いので、発見に努め、見つけ次第捕殺する。
- 4 新芽や花蕾には卵や若齢幼虫がいることが多い。摘心した側枝や蕾はほ場外に持ち出し処分する。
- 5 生物農薬を活用した防除を行う。
- 6 作物残さを適切に処分する。
- 7 蛹化は土中で行われる。発生の多かったほ場では、ロータリーをかけたたりほ場を冠水することで、土中の蛹を死滅させる。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交信かく乱剤を活用する。
- 2 生物農薬を散布する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

ハスモンヨトウ

・ [共通防除の章のハスモンヨトウの防除の項](#)を参照する。

(予防に関する措置)

- 1 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆や防蛾(が)灯(黄色灯)の夜間点灯を行う。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 交信かく乱剤を活用した防除を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 2 卵塊や若齢幼虫が群生している葉を見つけ次第、除去する。
- 3 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性などが確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 4 生物農薬を活用した防除を行う。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に密閉処理を行う。
- 6 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交信かく乱剤を活用する。
- 2 生物農薬を散布する。
- 3 若齢幼虫のうちに、薬剤を施用(散布)する。

ナメクジ、カタツムリ

・ [共通防除の章のナメクジ・カタツムリの防除の項](#)を参照する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 野菜くずの捨て場等の発生源を除去する。
- 2 ほ場の通風や排水を良好にし、地表部を乾燥させる。
- 3 農作物の過繁茂を避け、収穫後の畑はできるだけ早期に整理する。
- 4 畑周辺の小かん木、小竹などの茂みを伐採整理し、不必要な石積等は取り除く。
- 5 畑周辺の清掃を図った上で、潜伏場所となるような濡れむしろ等を設置し、誘引捕殺する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#) [【ナメクジ】](#)・[【カタツムリ】](#)

- 1 粒剤は雨が降ると有効成分が流亡してしまうので、天候を見極めて活動直前の夕刻に処理する。ハウスや温室内では、2～3日間はかん水がかからないようにする。残効期間は短い。